

私は長く働いていた病院で多くの患者さんに出会うなかで、同じ病気を抱えながら病気に負けて悲観する人と、それを乗り越えて生きる人との違いがどこから生じるのだろうかと考えだしました。

私は54歳で病院を退職し、さまざまな事情にとらわれて精神的に困難に陥っている人たちのカウンセラーをめざして学習を始めました。その生活資金稼ぎのために、とりあえず選んだのが介護職でした。

どこの介護の現場にも、解決しなければならない問題が溢れていました。施設の管理運営、施設設備の欠陥、労働条件、それに介護保険本体上の問題などに囲まれ、そこで働いている介護労働者には命を預かる責任がいつも伴い、心身ともに過酷な場面が多いのです。しかし、それでも働き続けられるのは、そこに居る高齢者の人間性に日々助けられるからです。

私は、そこで出会った高齢者から鮮烈な人生体験を聞かされ、介護の世界にのめり込みました。以来16年間ほど介護に携わってきました。

介護の現場で働いてこられたことに私はとても感謝しています。ここで出会った人たちから、人が生きるといふことの意味を気付かされ、教えていただきました。出会った人から聞かされる一人ひとりの生き方は尊いものでした。私はこれまでの自分の生き方の自己中心性に気付かされ、生きるために人と出会うことの大切さを学ぶことができました。

その方々のことを記録に残しておきたいと、私がノートしてきたことを記したのがこの本です。すべての方を記録したわけではありませんが、私の心に衝撃を与えた方々をここに紹介しました。

高齢者との会話はゆっくりとして、一つひとつの言葉が短く繰り返されます。その趣きを表現したくて、文章ではなく、短文で記してあります。地方での介護体験なので、ありのままに示すために方言をそのまま記しました。わかりにくい言葉もあるでしょうが、そこは語っている雰囲気でご理解ください。

高齢者の暮らしには2000万円の備蓄が必要だとか、介護保険の自己負担を2割にするとか国は言っていますが、介護の現場から見ると、それは実に現実離れた感覚としてしか映りません。高齢者の方々はもちろん年金暮らしですが、みんな今の暮らしを精いっぱい生きているのです。我慢して、やりくりして、支え合って暮らしを立てています。その方々の思いを私は伝えたいのです。

年金の少ない私は、妻がガンを罹病し、その医療費のためにも65歳を超えても介護職場で働いてきましたが、70歳を超えた今は、あとしばらくで退職したいと考えています。介護労働はチームワークです。互いの個性や違いをぶつけるのでなく、どう繋げ、支え合っていくのか。ストレスがないわけではありませんが、みんなと一緒に考え行動し要介護者と一体となれた時、仲間のありがたさ、人を信頼することや人間の可能性を思いきり感じることができる—介護労働とはそのような仕事です。この本は、そんな私の介護職体験のまとめでもあります。

これから介護で働いてみようかなと思っている方、介護職場で働きながら悩みや不安を持っている方、そういう方に私の体験記録が役立つなら、それ以上に嬉しいことはありません。

本書は、あけび書房代表の久保則之氏の緻密な編集と励ましによって出版することができ

ました。またこの介護ノートは、日頃から私の介護福祉運動を指導し支えてくださった金沢大学名誉教授の井上英夫先生のお力によるものです。心からお礼申し上げます。

昨年2018年、48年連れ添った私の妻が亡くなりました。家計を少しも考えない私の生き方に小言を言いながらも支えてくれた妻に感謝し、本書を捧げます。

2019年9月17日 黒梅 明